

- ☒ 話すこと ☐ 書くこと ☐ 個に応じた教材の作成や指導の充実 ☒ 授業での活用 ☒ 家庭学習での活用
☒ パフォーマンステストでの活用 ☐ 課外活動での活用

実践の ポイント

AIとの対話でまず教師が見通しをもち、アセスメントの結果から更なる指導改善を図る

実証概要

<校数> 5校(中学校:5校) <人数> 791名(中学校:791名)
<学年> 中学校:第3学年 <アプリ 等> LANGXSpeaking(株式会社エキュメノポリス)
<AI機能について> アセスメント:様々な情報を生徒の発話から収集し、AIが生徒のスピーキング能力を詳細に分析する。
プラクティス:教科書で扱う話題について、AIと対話することで、授業で身に付けるべき技能や表現をイメージする。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

● AIとの対話で言語活動をより具体的にイメージし、授業に生かす (プラクティス)

「単元終末に実施する活動」と「AIとの対話」の話題を一致させている。教師は単元の学習を始める前に、AIと対話することによって、単元で指導すべき会話技能や語彙、英語表現などを具体的にイメージし、生徒は、授業で学んだことをAIとの対話で試すことができる。実際に各単元での言語活動の量が増え、生徒の発話に対する抵抗が軽減され、パフォーマンステストでの発話量が増加した。

● アセスメントの活用で指導法の効果検証を

期間を空けて2回のアセスメントを実施。話す力を6つの観点「表現の豊かさ」、「文法的正しさ」、「発音」、「流暢さ」、「一貫性」、「やり取り」で評価することによって、指導方法の効果検証が可能となる。スコアの変化やモデル校での授業参観から得られた知見として、言語活動の量を増やすことは発話への抵抗を減らすために有効であるが、表現させただけで終わらないこと、生徒の英語表現を丁寧に見取り、指導することの重要性が明らかになった。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

AIやALTとの対話により、発話量が平均約44語増加し、やり取りの力でもA2レベル層が拡大するなど流暢さが向上した。一方で正確性には課題が残り、今後は語彙・文法や発音の指導による質の向上が焦点となる。

②児童生徒の関心・意欲の変化

前後のアンケートで、英語の勉強が好きと答えた生徒の割合が4.7pt伸び、55.9%に増加した。51.8%がAIを使った学習により、英語をもっと勉強したいと答えた。言語活動の量が増え、生徒は、英語で表現することの楽しさを感じていると考えている。

③教師の指導の変化

AIによるフィードバックが自身の指導改善にあまり役に立たなかったと回答した教員が4割いた。それが、言語活動の量のみ増加につながっている。今年度のテスト結果から課題や取り組むべき内容、意識すべき観点を明確に示すことが重要であると考えた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AI英語モデル校事業で得られた知見を交流し、市内研修会にて発信

- ・モデル校同士は、夏休みに実施した中間交流会で、担当する単元の授業実践で得られた知見について交流した。
 - ・市内英語担当者が集まる悉皆研修にて、講話・演習の形式で、以下の2点について特に強調して発信した。
1. 単元を通して、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確にした言語活動に取り組むこと。
 2. 生徒の活動を丁寧に見取り、目的や場面、状況などをふまえて、適切に表現する姿を価値付けること。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●言語活動の充実から生まれた、生徒たちの話すことに対する変化

単元終末の活動を共有し、AIとの対話でそのイメージをさらに具体化することによって、言語活動の量が増え、生徒の積極的な発話が促された。しかし、生徒の英語表現を丁寧に見取り、指導するというプロセスに課題が見られた。そのことは授業参観やアセスメントの結果から明らかになってきている。今後は、汎用型生成AIを活用して、学級の傾向を把握したり、生徒自身がAIにフィードバックを求め、自身の表現を改善することで、「文法的な正しさ」や「一貫性」のスコアの向上を目指したい。